



* 球磨郡水上村・湯前町担当
中島 政利さん

第三十八森林区………

え？広報くまもの取材ですか。そりやあどうも、まあ私たちの仕事は山が相手ですから、平坦部の人々にはあまり知られていないでしょうね。よろしくお願ひします。

私が林業改良指導員になったのが七年半程前です。山が好きで私はうつつの仕事をすよ、この「三十八森林区」の担当になったのが四年前……「三十八森林区」ですか？いやあれは失礼。この森林区というのは熊本県をAからEまで区域別に区切り、それを更に六十一の森林区に細分化し、改良指導員が一区あて担当して仕事をしているわけです。ですから、私はD森林区球磨郡の三十八森林区(水上村・湯前町)を担当しているというわけです。

名いますが、何も私だけでなく、この同僚達は皆山や木の好きな男ばかりですよ。自慢じやないですがね、どの山のどの位置には、何の木がどういふ具合になっているか……というようなことは、もうすつかり覚え込んでしまっています。

担当面積二万ヘクタール………

あ、仕事の内容ですか大まかに分けて経営指導と改良普及の二つになります。前の経営指導というのは伐採届や申請書関係、林業関係の融資のお世話、保安林関係、県有林の管理運営などで、これには事務的な仕事も含まれますが、やはり巻ゲートルに地下足袋で現地調査や巡視もやります。伐採調整簿や造林調整簿も常に現地と照合して、担当区内の状況を把握しておかなければなりませんし、仲々忙しいですよ。面積ですか、県全体の林野面積は約四十八万ヘクタールですが、この私の三十八森林区は約二万ヘクタール、このうち九三%は森林で、二%が農耕地なので、いかにこの地区の人々が林業によつて生きていかねばならぬわけでしょう。年間の所得からみても六〇%は林産収入ですからね。だが人工造林は林野総面積の三五%しかなく大半は新しい植林を持つていてという有様です。それだけに、私たちも仕事のやりがいがあるというわけです。この広い林野を立派に育て、熊本県の林業の発展のために働くことができるという誇りといふますか、さつき何かおつしやいましたね、そう、第一線の人々……私たちはそんな気持ちで頑張っています。

話が横道にそれましたが、いま一つの大きな仕事は改良普及事業、平たくいえば、森林所有者の良相談相手となつて新しい技術を教えたり、愛林思想といひますか、その普及に努めたり色々やりますよ。例えば山林経営や育苗、造林、病虫害の防除など、どしどし新しい技術を導入して指導していますし、モデル部落やモデル農家を指定して戸別や集団指導をやる、林業座談会や集会にも出て行つて話もすると、まあ山の木のお医者さんか、森林学校の先生といふところでしょうねハハハ……

林業開発青年隊に期待………

ところで、いま私が大きな期待をかけているのが……ほらさつき山を下つて行つた青年たちがいたでしょう。開発青年隊の人たちです。五班編成で、合計三十五名の青年たちが、いま熱心に森林と取り組んでいるのです。

どんなことをやるかといひますと、共同経営林をもつていて、育苗や造林等あらゆる林業技術の研究も指導しますし土壌調査や山林測量の方法も勉強しています。この青年たちが、やがては優秀な林業家となつて、熊本県の林業開発の先頭に立つかと思えば、疲れも何もふつ飛んでしまひますよ。

苦しいこと・嬉しいこと………

え、山歩きは大変だろうつて？とんでもない。山こそわがふるさと……ですよ。

それあ苦しい事もありますがね。例えば造林地の測量や査定或はスキタマバエの駆除指導などの際は、担当区の山道を毎日二十キロ位も巡回指導して歩くのですが、これが一カ月も続くのです。しいたけの乾燥期になれば、毎晩徹夜で一週間位づつ通し技術指導をやりますし、冬の真夜中、座談会を終えて遠い山道へ帰る時など「俺は山が好きだからこそ苦にならないんだなあ」とつくづく思うことがありますよ。

何だか自慢話の様になつてしまいましたか、やはりつらいと思ふことよりも嬉しいことが多いですね。最も嬉しかったのが三十二年度から昨年度まで三年連続で水上中学校と湯前小学校が、全国学校植林コンクールで入賞したことですね。三十三年度には私も東京での表彰式に参列しましたが、生徒たちと一緒に植林し、下刈りするのはとても楽しいものですよ。

私はできるだけ永くこの水上村に駐在させてもらつて、県の林業政策の、第一線の人々としてしつかりやつてゆきますよ。

……私一人がとりとめないことばかりおしやべりしてしまつてすみませんでした。

話に夢中になつていふうちに、すつかり冷え込んでしまつたね、さあ、薪をどん／＼燃やしましょう。

(写真・測量指導中の中島さん)

村を離れる労働力………

第一には、農民自体の問題としての農業労働力構造の変化である。農家の子供で中学、高校の新卒者は全国で約八十五万人、戦前は約半数が農村に止つたが、近年の推計によれば約二十万人ほどしか村には残らない、若い農業労働力はぐん／＼減少してゆくのである。もちろん一方に、中年すぎた人達が都市から農村に帰る。だから農業の働き手は次第に老年者の比重を高めていく。

この傾向が将来も続いていくとすれば現在の農村就業人口千四百万人は十年後には千百万人程度に減少し、更にその年齢構成はずつと老化化するものと推測される。すなわち労働の量と、質の低下である。いまのところ農業就業者数は減つても農家戸数はそれほど減らない。しかし一世代すぎると戸数も減つてくるものと考えられる。

販売の協同化を………

第二に、国民の食糧構成の変化の速度が意外に急速であることである。前項では農村の労働力構成の変化にふれたが、農産物需要の変化してゆく事実も注目されよう。

穀物その他澱粉質食糧の摂取量が減り畜産物や果物、高級野菜さらに加工食品等の消費が増加することは容易に推測できらるが、農業生産の構成は、当然その様



「農村の窓」

新しい農業経営への心がまえ

「転換期を迎えた日本農業」このような題目は、最近新聞・ラジオその他でしばしば耳にし、又目に映るものであるが、日本農業のいわゆる転換期とはどういうことを意味しているのか……

な需要の変化に対応しなければならぬし、又それでない農業所得の向上をはかることは困難である。もし農業が現在のまゝのやり方を続けていくものとすれば、一方には米が余り、又一方には畜産物が不足して外国から輸入しなければならぬような事態が起きることも考えられる。

また、畜産物、高級野菜等についてみるとその生産の伸びと需要の増大はいつもつり合いがとれていくものではなく、時期的に需給の不均衡を生じ価格の変動がはげしくなるだろう。そのことは昨年来の豚の価格、この数年来の牛乳の価格にもあらわれていっている。こゝに需給関係の調整を農家の立場でいへば販売についての協同化、政策的には市場機構の整備が急務であると考えられる。

貿易自由化と農産物………

第三に、貿易自由化に伴う海外農産物との競争である。前項に述べたように国民食糧構成の変化は必然的に農業生産の構成に変化を与えるものであるが、同時に日本の農産物が価格支持や、輸入制限で国際価格より可成り割高であることを見逃すことはできない。

今こゝで日本農業の国際競争力について考えてみると、農業従事者一人当りの食糧の生産高はアメリカ、カナダの農民は二十人分の食糧を生産し、デンマークオランダの農民は十人分、文明国中最も

生産の低いイタリヤでさえ六人であり、日本の農民はたつた二人分の食糧を生産するにすぎないのである。

もし農産物の価格が同一であれば日本の農民の収入は外国の農民に比べて三分の一十分の一という低さになつてしまふのである。国際的に低くだけでなく、国内の他産業に比べても非常な差があるといふので支持価格制度が採用されているわけだが、国際的な貿易自由化の機運と、支持価格制度に要する失費の問題から今や農産物価格支持制度は徐々に崩壊して行くものと考えても差支えなからう。特に日本農産物の中で国際競争力の低いものとしては麦類、畜産物(特に牛乳加工品)油脂作物等が挙げられ、これ等は何れも第二項に述べた次代の国民食糧構成の主眼を形成するものであり、今後の農業生産の重点を占めるべき農産物であるだけに、農業関係者の頭痛の種ともなつていふような状況である。

以上、三項目にわたつて転換期を迎えた日本農業について説明して来たのであるが、いづれもそれ等が成り立つ素因は複雑で、深刻であり、なみたいていの努力では克服することは困難ではあるが、農民自体の手でもつてできることは、生産手段各部門母の生産性の向上であり、又生産販売を一貫した協同化と、生産部門各個の補完関係を確立させる以外にはないと思われらる。

(次頁へ)